

この後は平凡な沢歩きで、所々に倒木があり、苦勞する。

しばらくすると水もなくなる。尾根を越えて松峯沢に入ることを考え、一一時一〇分、遡行を打ち切つて溜

れたスラブ状の枝沢に取り付く。

(記・全)

「タイム」 出合(一〇::二〇) ↓ 遡行

終了(一一::二〇)

た。

ここを抜けると、今度は沢が伏流になっていて、石の上を歩くだけになる。伏流が終わつた所はもう白根沢との出合であった。はずれの沢であった。

(記・)

「タイム」 下降開始(一一::五五) ↓

白根沢出合(一二::四五)

松峯沢

一九八四年七月一五日

一一時五〇分、沢に降りる。降りた地点より五〇㍀程上流に行くと、水量比一対一のはっきりした二俣があった。

この沢も相変わらずナメの沢かと思つたが、ナメのあつたのは最初のうちだけで、あとは小滝が二、三あるのみの平凡な沢であつた。

途中昼食にするが、食べ始めたときたん雨が降つてきた。誰かが言つた。

「大西さんと一緒じゃ仕方ない。」

楽しいはずの昼食も早々に切り上

げ、先を急ぐことにする。

少し歩くと、倒木群がある。朽ち

かけていて、体重

のある人は、枝に

乗るたびに「パキ

ツ」と枝を折つて

いる。かなり長く

続いたように感じ

